

## 第29回 研究助成

## B 実践部門・報告Ⅲ・英語能力向上をめざす教育実践

# 聴覚障がいをもつ生徒の英単語の 読みと綴りの関係性理解向上のための 自作デジタル教材の作成と活用

研究代表者：千葉県／筑波大学附属聴覚特別支援学校 中学部 教諭 廣瀬 由美

共同研究者：千葉県／元筑波大学附属聴覚特別支援学校 中学部 教諭 有馬 里佐

《研究助言者：長 勝彦》

## 概要

聴覚に障がいをもつ生徒の中には英検3級一次試験に合格する力を身につけているにもかかわらず、音読の誤りが多い生徒もしばしば見られる。また、tとf、tとr、dとclといった、視覚的な類似性はあるものの英単語の読み方を意識していれば起こらないであろう綴りの誤りもよく見られる。また、通常の中生と同様、英単語はローマ字と比べ音と綴りの間の関係性が複雑なため、英単語習得につまずきを覚え、学習への意欲を無くしていくこともある。そのような状態を改善するために、英単語習得の際に音声情報と文字情報を関連付けていくことで効果的に学習を進めることができることに気づかせ、英単語をよりスムーズに習得させることを目指し、フォニックスを活用した教材の試作版を作成した。本研究では、試作版の教材を聾学校の英語教育に関わる教員に公開し、アンケート結果を元に改善点を考察し、教材の修正を行った。生徒自身がより主体的、積極的に英語学習に取り組めるように検討し、新たに追加した演習編、応用編の拡充や修正、教材の効果の客観的な検証が課題となった。

## 1 はじめに

### 1.1 問題の所在

聴覚に障がいをもつ幼児・児童・生徒の通う特

別支援学校(以下、聾学校)でも単一障がいの場合には、通常の学習指導要領に準じた各教科の教育が行われている。勤務校に通う生徒達は、幼少時から補聴器や人工内耳などを用い、残された聴力を活用しながら、発音・発語や読話等の学習を通し、音声言語を用いてコミュニケーションをとる聴覚口話教育を受けている。そのため、程度の差はあるもの、音声を発しながらコミュニケーションをとる生徒が多い。

しかしながら、英語学習においては日本語習得の際に身に付けてきた聴覚活用や発音・発語の能力を十分に応用できておらず、英検3級一次試験に合格する力を身につけているにもかかわらず、二次試験対策を行うと、思いのほか音読の誤りが多い生徒も見られる。

また、tとf、tとr、dとclといった、視覚的な類似性はあるものの英単語の読み方を意識していれば起こらないであろう綴りの誤りもよく見られる。

さらに、英語教育全体を考えた場合に、英単語はローマ字と比べ音と綴りの間の関係性が複雑なため、聴覚に障がいを持たない中学生にとってもネイティブスピーカーにとっても英単語の綴りを習得することは決して容易なものではない。

英単語習得につまずきを覚えると、学習への意欲を失っていくことも多い。多くの教員の実感として、一つ一つ辞書を引いて、意味、音、綴りを一致させ、単語練習を繰り返す行うことで、音と綴りの関係を自然に習得していくことができる

生徒も多く、200語程度の英単語の綴りを習得できると、その後はそれまでよりも容易に綴りを覚えられるようになるということが語られることが多い。しかし、自然に関係性を習得できない生徒や根気よく学習に取り組みず、その段階に達する前に挫折してしまう生徒も一定数存在するため、関係性をより容易に理解させられるような教材が必要となる。

## 1.2 本研究の目的

英単語の綴りを習得する際のつまずきや聾学校の生徒特有の誤りを改善するために、フォニックスを活用して指導ができないかと考え、平成15年から平成23年までかけて手書きプリントを作成し、修正を重ねた。それらの手書きプリントを元に平成23年度にMicrosoft Power Point を用いてデジタル教材を試作し、一斉授業で指導に用いた。筑波大学附属聴覚特別支援学校中学部(2012)は、その教材の概要や授業を受けた生徒への質問紙調査の結果などについて文部科学省・筑波大学主催平成24年度(第39回)聴覚障害教育担当教員講習会中学部配付資料にて公表した。その後、綴りの学習につまずきの見られる生徒を個別指導する際に使用して指導しながら、改善を図ってきた。

そこで、本研究では、英単語習得の際も音声の情報と文字情報を関連付けていくことで効果的に学習を進めることができることに気付かせ、英単語をよりスムーズに習得させ、文法的な学習と並行しながら、英語でのコミュニケーションに積極的に取り組める生徒を育てることができるよう教材作成や活用の方法について検討することを目的とした。

## 2 本研究の内容

### 2.1 聾教育における英語教育に関する先行研究

佐藤ら(2015)は通常教育における英語科教育を巡る動きを踏まえた上で、日本の聴覚障がい児童・生徒に対する、英語科教育、外国語活動に関

する文献を学術雑誌、紀要、書籍等から収集し、分析している。聴覚障がい児童・生徒を対象とする特別支援学校(聾学校)では、1970年代までは聾学校の生徒に対し英語教育を行うこと自体に意義があるのかどうかという議論が行われ、国語教育を重視することとの関連で、週時数1~2時間という状況にあったこと、1987年に視覚・聴覚障がい生徒を対象とした筑波技術短期大学が開校したこともあり、1980年代以降、聴覚障がい生徒にとっても英語は就職や進学の際に一般教養として必要であるという論調が強くなったが、実態としては学年を下げた教科書の使用などについての紹介がなされている。1990年代になると平成元(1989)年の学習指導要領の改訂で「コミュニケーション」という言葉が初めて登場した影響で、「話すこと」への対応、ALTの導入について議論されるようになってきた。さらに、2000年代になると、松藤(2009)が指摘しているように、特別支援学校(聾学校)出身者の海外留学も珍しくなくなり、聾学校の英語教育の目標をより高いところに設定する必要が出てきた。その一方、秋山(2009)が指摘しているように、依然として「英語よりもまず日本語」という考え方も存在している。英語学習におけるコミュニケーションの側面については、松藤(2004)、秋山(2009)などアメリカ手話(ASL)を活用した取り組みが数多く報告されている。

音声面に関しては、松藤(2011)が述べるように、英語教育ではカナをふることは推奨されていないが、聾学校では文字やカナを振ることが奨励されている。英語の音の指導については常に議論の対象になっているが、聾学校では正確な発音は求めないものの、ある程度「英語の音」を理解させるべきだということが広く認識されている。

このような状況の中で、聾学校の英語教育においても、従来、フォニックスを活用した指導は行われている。例えば、早川(2012)は高等部2学年進級段階で、習熟度が最も厳しい生徒を対象にフォニックスを継続指導した結果、単語が読めるようになったことから、単語学習に意欲的に取り組む姿勢が見られるようになったという報告をしている。

比嘉(2013)は中学部3年生3名に対し、フォニックスを用いた指導を行い、文字と音を対応させて単語を習得し、フォニックスを利用して未習語を

読めるようになったと述べている。

また、白井(2011)も新潟の難聴中学生のための英語学習会でフォニックスを活用して英単語を習得させる実践を行い、聴覚障害生徒は、単語のスペルを書く練習だけでは身につかず、①スペル、②読み(綴りに合わせて読める)、③意味の理解が必要となると述べている。

一方で、フォニックスは限られた授業時数の中で指導に取り入れるには例外が多く、ルールが複雑すぎる、正確な発音を求めないのであればルールとして不完全になるので不要であるなど否定的な見解を述べる教員も多いのが実情である。

## 2.2 試作版教材作成の基本方針

市販のフォニックス教材の多くはネイティブの子どもが習得する際に早期に身につける単語を元に作られているため、必ずしも中学生の学習語彙と一致している訳ではない。また、フォニックスの指導はあくまでも音と文字を結びつけることが目的であり、意味との結びつきについての指導は別途行えばよいとする傾向があるが、中学生の学習に対する意識・態度を踏まえると、教科書や問題集などに頻出する語彙について取り上げて、意味も理解した上でルールの整理や確認をしていくのが望ましいと考えた。したがって、作成した試作版では中学1~2年生の英語学習によく用いられる英単語を取り上げることを念頭に置き、英単語を選び、それらをフォニックスの基本的なルールを参考にして整理した。その際、前後の文字によって読み方が決まるものについても、説明が煩雑にならないように画面上には細かい説明を載せず、必要に応じて解説できるようにした。

また、市販のフォニックス教材はCDで音声を聞きながら学習するものが多く、読み方をカタカナで振ってないものも多い。試作版教材を作成するにあたっては、聴覚の活用が難しい生徒も音声情報を視覚的にとらえられるよう、英単語の読み方をカタカナで示した。

英単語の発音をカタカナで示すことについては賛否両論あり、またどのように表すかについても様々な方法・考え方があつた。坪田清・上野舞人(2016)では、若林(1997)、中村・森住(2001)、田尻(2010)、島岡・島岡(2013)の4つを比較し、それ

ぞれの特徴を音素に照らし合わせ、比較・検討している。その上で、音素以外にも公教育において求められる英語カタカナ表記の条件として、信頼性が高いこと、どのような児童・生徒にとっても理解が容易なこと、教師にとって負担にならないことを挙げ、最も使い勝手の良い英語カタカナ表記は島岡・島岡(2013)であると結論付けている。

しかしながら、本試作版教材では、勤務校生徒にとっての分かりやすさを第一に考え、勤務校使用教科書に準拠し、多くの生徒が使用している『ニューホライズン英和辞典』の表記方法を採用した。

### 2.2.1. 試作版の種類と特徴

#### 2.2.1.1. 手書きプリント

平成15年頃から「英単語の読み方、書き方を覚えるコツ」と題した手書きプリントの作成を開始し、平成23年まで修正を重ねた。プリントは「入門編」、「基本編①子音の文字の場合」、「基本編②母音の文字の場合」の3枚で、入門編では、英単語の綴りと読み方の関係についての基本的な事項を扱った。具体的には、英単語の綴りと読み方の関係はローマ字ほど規則的ではないが、一定のルールがあるということを最初に述べ、それぞれのアルファベットは漢字で言う音読み・訓読みのような2つの読み方(教材中では「フォニックス読み」、「アルファベット読み」としている)をもっていること、強勢(アクセント、ストレス)がないところには母音の文字が入らないことが多い(母音のないところは強勢がない)こと、最後にeがつく場合はその前にある母音字はアルファベット読み(二重母音)になることなどを扱っている。

基本編は、さらに子音編と母音編に分け、それぞれの文字の基本的な読み方を示し、そのように読む単語を例として挙げた。複数の文字が組み合わさっている場合(例:ch, thなど)についても扱っている。

例とする語の選定については、できるだけ生徒が中学校の教科書やワークなどで触れることの多い単語を取り上げるよう心掛け、授業を行う中で、取り上げると理解しやすくなる単語を少しずつ加え、改定を行った。

発音の表記については、使用教科書に準拠する『ニューホライズン英和辞典』の他、複数の辞書の表記を参照しながら、カタカナ語とも関連させ

やすいカタカナ表記にした。

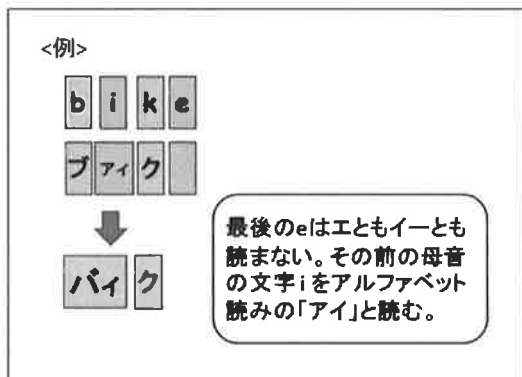
強勢は読み方の文字を○で囲むことによって表し、該当する文字と読み方に下線を引いて示した。

### 2.2.1.2. デジタル教材

平成23年までプリントと板書のみで授業を展開していたが、ルールを説明するためには例となる語を複数提示する必要があり、かなり板書が細かく、煩雑になっていた。電子黒板で提示できるデジタル教材にまとめることによって、より多くの例を取り上げながらも、迅速に分かりやすく提示して授業を進めることができると考え、平成23年にデジタル教材作成を行った。

具体的には2.2.1.1の手書きプリントの内容を元にMicrosoft Power Point を用いてデジタル教材を試作し、一斉授業で指導に用いた。

このデジタル教材も手書きプリントと同様、入門編、基本編(子音編・母音編)の3つに分かれている。強勢は読み方の文字を大きくすることで表し、該当する文字と読み方を赤字にした。(図1,図2)



■図1:入門編のデジタル教材の画面例

子音編 d:ドウ (ダ行)

dog	[ドッグ] イヌ	student	[ステューデント] 漫画
do	[ドゥー] する	friend	[フレンドウ] 友達
day	[デイ] 日	study	[スタディ] 勉強する
desk	[デスク] 机	bird	[バードウ] 鳥

■図2:子音編のデジタル教材の画面例

### 2.2.1.3. 試作版についての生徒アンケートの実施とカード教材の作成

2.2.1.2の試作版について、勤務校中学部在籍生徒を対象にアンケート調査を実施し、その結果について廣瀬(2016)は第50回全日本聾教育研究大会(附属大会)第3分科会-2(学力と教科教育I(文系・中学部・高等部))で口頭発表を行なった。

また、生徒から単語カードのような教材が欲しいという要望が出たため、デジタル教材のスライド画面を印刷したものをラミネート加工し、リングで綴じた教材を作り、生徒に利用させた。

## 2.3 試作版の配布と教員アンケートの実施

このようにして作成した試作版について、10月に行われた第50回全日本聾教育研究大会(附属大会)第3分科会-2(学力と教科教育I(文系・中学部・高等部))で口頭発表した際に、画像データをDVD-ROMに入れ、分科会に参加していた約30名の教員に配布した。また同じ内容のDVD-ROMをアンケート、発表資料とともに全国の聾学校(104校)、聴覚障害英語教育研究会のメーリングリストで募った希望者等に送付し、23の聾学校、43名の教員からアンケートに回答があった。アンケートの質問項目は、試作版教材の有用性、希望する教材の形状、活用に適していると思う時期、活用の方法について選択肢から選び、理由等を自由記述で記入していただき、最後に意見、感想を自由記述で記入していただいた。

### 2.3.1. 教員アンケートの結果

#### 2.3.1.1. 試作版教材の有用性

「教材は生徒が英単語を覚えるのに役立ちそうか」を「まったく役に立たない」「あまり役に立たない」「少し役に立ちそう」「大いに役に立ちそう」の4件法で尋ねた。

「まったく役に立たない」は0人、「あまり役に立たない」は4人、「少し役に立ちそう」が24人、「大いに役に立ちそう」が14人であった。(1名は「あまり役に立たない」と「少し役に立ちそう」の両方に丸を付けていた。)

また、「まったく役に立たない」を1、「あまり役に立たない」を2、「少し役に立ちそう」を3、「大いに役に立ちそう」を4として計算した平均値は3.22

であった。(ただし「あまり役に立たない」と「少し役に立ちそう」の両方に丸を付けていた方は2.5として計算した。)

そのように考えた理由を自由記述で記入していただいたが、「あまり役に立たない」と答えた理由は、日ごろ担当している生徒が音声を用いてコミュニケーションをしていない、あるいは音声を用いたコミュニケーションに消極的で音読を拒否しているなどの状態で、読みと綴りを関係づけることが難しい、ルールが多く、理解したり、覚えたり、適応したりできそうではなく、かえって学習負担が増えそうといったことが挙げられていた。

### 2.3.1.2. 希望する教材の形状

希望する教材の形状については、プリント、カード、PC用、タブレットPC用、スマホ用、その他を選択肢として挙げ、希望する順に1番から4番まで記号で答えるようにした。1番を4点、2番を3点、3番を2点、4番を1点とし、計算した結果は表1のとおりである。

思ったよりもプリント、カードといったアナログの教材を希望する意見が多いが、欄外にデジタルを希望するが、学校に十分な環境が整っていないという内容の記述も複数見られたので、今後、情報機器の環境が整っていった場合、デジタル教材のニーズが高まる可能性は高いと考えている。

### 2.3.1.3. 活用に適している時期、活用方法

活用に適していると思う時期、活用の方法については、「( )年生の( )頃」という回答欄を設け、自由に記述していただいた。英語を学習し始めたらすぐに扱った方がいいという意見とある程度学習が進んでからの方がいいという意見、不完全でもよいので早い時期に導入してこまめに復習したり、新出語句が出てくるたびに繰り返し触れたりするのがよいだろうという意見があった。

## 2.4 教材の修正

アンケートの回収を行うと同時に、回答で指摘のあった箇所、以前から自分自身で修正したいと思っていた箇所から、順次、教材の修正を行った。

### 2.4.1. 入門編、基本編(子音編・母音編)の修正

強勢については丸囲みの方が分かりやすいという意見があり、修正した。(図3)

子音編 d:ドウ (ダ行)			
dog	〔ドッグ〕 イヌ	student	〔スチューデント〕 生徒
do	〔ドゥー〕 する	friend	〔フレンドゥ〕 友達
day	〔デイ〕 日	study	〔スタディ〕 勉強する
desk	〔デスク〕 机	bird	〔バードゥ〕 鳥

■図3: 子音編のデジタル教材画面例

試作版では発音記号を用いていなかったため、特に母音編では正確に分けることが困難で、ルールの説明が分かりにくいものとなっていた。教員アンケートでも同様の指摘があり、画面内に発音記号を表示することにした。母音に関しては取り上げたルールが不足しているように感じられたので、いくつかのルールを追加した。

子音についても、thやfをsやhと区別するためにひらがなを用いた方がよいという意見を複数いただき、画面上に発音の仕方について簡潔な説明を加え、ひらがなを用いて区別する表記の仕方があることをノートに記述し、必要に応じて解説できるようにした。

また、単語の難易度を示すために、中1で学習するか否かでセルの色分けを行っていたが、使用教科書によって学習する順番が異なること、小学校で外国語活動が始まり5年あまりが経過して曜日、月、時間、色、食べ物(果物、料理)、飲み物、動物、スポーツなど読みレベルでは理解している語

■表1: 希望する教材の形状の順位得点換算値

プリント	カード	PC用	タブレット用	スマホ用
104	118	79	55	9

が増えていることをふまえ、色分けは取りやめた。

画面上に表示される情報量が多すぎるという指摘が複数あったため、一部の説明をノートに移し、教員のみが参照できるようにし、対象生徒の実態に合わせて説明するという形に修正した。また、例として挙げた単語より平易で使用頻度の高い単語の例の提案などを受け、一部の単語を変更した。

その他、前後の文字との関連で読み方が決まるにも関わらず、そのことについて触れていないので不正確であるという指摘があったので、ノートに説明等を加筆した。

### 2.4.2. 演習編、応用編の追加

課題となっていた「生徒が能動的に取り組むための工夫」として、読み方の部分を隠しておいて、生徒に読ませてから、読み方を文字で提示・確認するアニメーションを入れた演習編、カタカナ語の元となった英単語の綴りを推測する練習をする応用編の作成を試みた。

1画面に何問入れるのが適切かなど検討課題があり、生徒に実際に取り組ませ、アンケートを取るなどして修正することが今後の課題となった。

## 3 授業の進め方の改善

### 3.1 教材を使った授業の進め方

当初は、中2の2学期以降に帯時間のように毎回少しずつ学習を行っていくという扱い方をしてきたが、早くルールの中容をつかんだ方がいいと考え、現在は中1の夏休み前に1時間または2時間の一斉授業で教材を活用している。

### 3.2 教材でルールを学習した後の定着に向けた指導の行い方

一度ですべてのルールを習得するのは難しいので、一斉授業以降、生徒の実態に応じて、繰り返し復習を行うことが重要である。それぞれの生徒の実態に応じて既習語が読めない時などにプリントやカード教材を参照させながら、指導を行っている。

また、従来は新出語句の学習の際、カタカナ表記が併記されている単語カードを提示しながら、発音して見せ、繰り返し音読させるという活動を行っていた。その後、既習語が読めない時などにプリントを参照させたり、同じルールを使った他の単語を読ませたりして、個別に指導を行ってきた。

現在は、新出語句の学習の際、はじめは英単語のみを白チョークで板書し、生徒が十分に習得していないルール(主に母音字に関するルール)の部分に赤チョークで下線を引き、単語の上にその読みを書き加え、生徒に単語全体の読みを推測させてから、確認のために単語の下に黄色チョークでカタカナ表記をするという方法を取っている。

このような進め方により、生徒自身がルールを適応して新出語を自力で読むという能動的な活動が増えた。それにより、ルールの習得が促され、未習語句でもすぐに読めることが増えてきているという実感がある。手書きでは時間がかかるので、今後、この方法で指導するのに適した形状の単語カードを作成し、授業で繰り返し、利用していくことを検討している。

英語の発音のカタカナ表記については、今後、様々な問題集、ワーク等に触れることも念頭におき、複数の表し方を併記することも頻繁に行っている。カタカナでは正確な英語の発音を表せる訳ではないが、そうすることにより、基本的なルールを習得して、およそ近い読み方をすることができる段階には達することができるようになっていたので、『ニューホライズン英和辞典』の表記のみにとらわれず、いくつかの表記を取り上げるように心がけている。また、単語ではなく、句や節、文になると、連音などで発音が変わるようなものについても適宜取り上げ、音読練習を行っている。

発音記号についても、若林(2016)のようにいちいち発音記号で発音を表記するから、記号がないと読めない生徒が思い込んでしまう、綴りを見てきちんと発音できるようにすることの方が大切であるという考え方もあるので、発音記号を使うことにこだわり過ぎず、「発音記号を使うとカタカナよりも正確に表記することができるが、ルールを身につければ記号がなくても読める」ということも伝えるように心がけている。

## 4 考察

この教材が「あまり役に立たない」場合として、回答にもあったとおり、日常の会話において音声を用いてコミュニケーションをしていない生徒や、ルールを理解したり、覚えたり、適応したりする能力・適性がない場合などが考えられる。確かに近年、身体の障がいにより起こる困難については代替りの方法で対応することが求められる社会になってきたこともあり、音声を使わず、聾学校内では手話、一般社会では筆談でコミュニケーションを取るという聴覚障がい者も増えており、特に成人聾者からは「英語は(音声で)話しても通じないから音読の練習は無駄である」といった意見をいただくことも多い。

しかし、勤務校の生徒を指導していると、英検一次試験の大問1のような、選択肢がある適語補充問題の場合に、一読して分からなくても、一つずつあてはめて英文を音読するように指示すると正答を選べるということが時折あるので、聴覚に障がいがある場合でもある程度音声を活用して日本語を習得したり、日常会話において日本語でコミュニケーションしたり、思考したりしている場合には、英語においても健聴者と同様な感覚で表現を選ぶことができると考えられる。そのような観点で英単語の読み方を習得させることが聴覚に障がいがある児童・生徒に対しても有効な場合があるといえる。

また、「筆談すればいいから音読は不要」という考えで国語(日本語)教育を行うことはパソコンやスマホなどでの文書作成の際に困難をきたす可能性もある。それは、ローマ字入力にせよ、カナ入力にせよ、漢字の正しい読み方を打たなければ、漢字を入力することができないからである。

聾学校の教育では、生徒達の国語力(日本語力)の改善が課題となっており、各研究会等でも国語教育(日本語教育)についての議論が盛んである。したがって、学級担任や部活動顧問として自立活動の時間などに日本語の指導を行うことが通常の学校と比べ、多くなっている。特に、勤務校では日本漢字能力検定の取得にも積極的に取り組んでおり、学級担任として家庭学習のチェックや

指導・助言を行っている。その中で、漢字の学習においても、「へん」は意味、「つくり」は音を表すことが多いことを利用して、既習の漢字と関連付けて、未習得の漢字の読みを指導することがある。ルールを理解しているがために「比較」を「ひこう」と読む生徒が見られるなど課題はあるが、漢字の一部分(部首)と読み方を結びつけるという指導の方法は一定の成果を上げていると考えている。英語教育においても一定数の単語を習得する際に基本的なルールを習得しておけば、初めて出会う単語でも読むことができ、意味を理解することができるようになる。そうすれば、グローバル化が進み、日本語の中に英語由来のカタカナ語が著しく増加している昨今、読み方さえ分かれば意味が分かるという語はますます増えていくと思われる。また、補聴器の性能の向上、人工内耳装用者の増加などを考えると、発音を文字で補い、音読練習を行いながらルールを習得させるような教材はすべてとは言わないが、相当数の聴覚障がい者にとって必要なものと考えている。

聾学校の生徒もより一層聴覚を活用していく可能性が増しているという意味では、今回の教材には音声データは載せなかったが、先生方のアンケートにも数人の記述があった通り、音声も再生できるようにする必要があるかもしれない。しかし、音声を手掛かりに学習を進めていくことが可能な生徒については、市販のフォニックス教材を活用していくことができる可能性が高いので、聴覚障がい児童・生徒向けの教材としては必須ではないとも考えている。

今回、追加した演習編、応用編は検討の時間が足りず、まだ質、量とも不十分なものではあるが、今後、実際の指導で活用し、生徒や他の先生方の意見を聞きながら、修正を加え、改善していくことにより、カタカナ語の知識を活用しながら、英単語の意味を捉え、英文の意味を正しく理解できるような生徒を育てられる教材を作成することができると考えている。

今回、多くの先生方からご意見やご感想をいただき、教材を改善することができたが、改善した教材を用いて、実践を行い、その効果を客観的に検証することが対象生徒の人数の少なさや時間不足のためにできなかった。今後、客観的に効果を立証できるよう、さらに実践をつみかさねていきたい。

## 謝 辞

本研究の実施および執筆の機会を与え、御支援くださいました公益財団法人 日本英語検定協会の皆さま、選考委員の先生方に心より御礼申し上げます。特に、助言者の長勝彦先生には、温かく丁寧な御指導をいただき、大変感謝しております。

## 参考文献 (\*は引用文献)

- 秋山奈巳(2009)『ヴィジュアル・アプローチの成果と課題』、『聴覚障害』,699,11-17
- 浅野博(2005)『ニューホライズン英和辞典』(第5版). 東京:東京書籍.
- 福岡久仁彦(2009)「小学校の外国語活動を踏まえた中学校での英語指導の在り方—発音と綴りを関連付けた指導の工夫を通して—」、『香川県教育センター研修生報告書』,1-12
- \* 拜田清・上野舞人(2016)「英語嫌いの児童・生徒への音声指導:SKTの可能性」,『神戸英語教育学会紀要『KELT』』,31,19-31.
- 早川就(2012)「聴覚障害児への効果的なフォニックス指導について」,『第18回九州地区聴覚障害教育研究大会 第4分科会 教科「英語」』.
- 比嘉千秋(2013)「単語の習得を図る英語指導の工夫 —フォニックスを取り入れた単語指導を通して—」,『沖縄県総合教育センター前期長期研修員第54集研究収録』, <聴覚障害教育>1-11.
- 廣瀬由美(2016)「聾学校中学部生徒の単語力向上をめざした教育実践 —読みと綴りを関連付けながら,基本的な英単語を身につけさせるために—」,『第50回全日本聾教育研究大会(附属大会)研究収録』,80-81.
- 児童英語研究グループ(2000)『CDフォニックスワーク Joyful Phonics』 大阪:むさし書房.
- ジュミック今井(2005)『CD BOOK フォニックス<発音>トレーニングBook』, 東京:明日香出版社.
- 笠島準一(2012)『ニューホライズン英和辞典』(第7版). 東京:東京書籍.
- 笠島準一(2015)『ニューホライズン英和辞典』(第8版). 東京:東京書籍.
- 草薙進郎・四日市章(1996)『聴覚障害児の教育と方法』, コレール社.
- 松藤みどり(2004)「英語の授業で用いる言語」,『平成16年度筑波技術短期大学公開講座「現代聴覚障害教育研修講座」』,23-27
- 松藤みどり(2009)「After twelve years」,『聴覚障害』, 699, 2
- 松藤みどり(2011)「外国語活動に思う」,『聴覚障害』, 724, 2-3
- 中村敬・森住衛他(2001)『ファースト英和辞典』(第4版),三省堂.
- 小山内洸監修, 斎藤央著(2006)『たのしい英語のフォニックス』, 東京:三友社出版.
- 齋藤留美子・齋藤了(2015)『新装版 書いて覚える楽しいフォニックス [(CD+テキスト)]』, 東京:マガジンランド

最後に, お忙しい中, 丁寧にアンケートに回答してくださった全国の聾学校の先生方, 講座や書籍等で教材をまとめるヒントをくださった先生方に感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。

- 島岡丘・島岡良衣(2013)『日本語で覚えるネイティブの英語発音』, 東京:ダイヤモンド社.
- \* 佐藤明子・谷村忠明・林田真志・川合紀宗(2015)「特別支援学校(聴覚障害)高等部を中心とした英語科学習を巡る動向」,『特別支援教育実践センター研究紀要』,101-111.
- 白井一夫(2011)『聞こえにくくても英語はできる 難聴中学生の英語学習支援マニュアル』,NEWHS(新潟難聴中学生のための英語学習会),難聴理解HB事務局.
- 田尻悟郎(2010)『田尻悟郎の楽しいフォニックス』(新装改訂版), 東京:教育出版.
- 竹内真生子(2012)『DVD&CD付 日本人のための英語発音完全教本』, 東京:アスク出版.
- 手島良(1997)『CDブックスらすら・読み書き・英単語』, 東京:日本放送出版協会.
- 手島良(2004)『NHK CD BOOK 新基礎英語3 英語の発音・ルールブック—つづりで身につく発音のコツ—』, 東京:NHK出版.
- 手島良(2016)『通じる英語の発音ドリル—逆発想でマスターする強勢・アクセント』, 東京:研究社
- 手島良(2011)「日本の中学校・高等学校における英語の音声教育について —発音指導の現状と課題—」,『音声研究』, 15(1),31-43
- 竹林滋・斎藤弘子(2005)『ルミナス英和辞典—つづり字と発音解説』(第2版). 東京:研究社.
- 竹林滋・清水あつ子・斎藤弘子(2013)『改訂新版 初級英語音声学CD付き』, 東京:大修館書店.
- 筑波大学附属聴覚特別支援学校中学部(2012)『文部科学省・筑波大学主催平成24年度(第39回)聴覚障害教育担当教員講習会中学部配付資料』, 筑波大学附属聴覚特別支援学校中学部.
- 水流清二(2000)「聾学校の音声指導とは?」,『新英語教育』,3月号,367,11-13
- 若林俊輔他(1997)『ヴィスタ英和辞典』, 東京:三省堂.
- 若林俊輔(1998)「カナ発音表記のこと—島岡教授の「批判」に答える—」『英語教育』,10月号,84-85.
- 若林俊輔(2016)「つづりと発音の関係の規則性」『英語は「教わったように教えるな』』72-78.
- 鷺見由理(2008)『DVD&CDでマスター 英語の発音が正しくなる本』, 東京:ナツメ社.